

緩和ケア病棟における動物介在活動に参加したがん患者の体験

Experiences of Cancer Patients Who Participated in Animal-Assisted Activities at a Palliative Care Unit

熊坂 隆行¹⁾ 片岡 三佳²⁾ 升 秀夫³⁾
Takayuki Kumasaka Mika Kataoka Hideo Masu

キーワード：動物介在活動，緩和ケア病棟，終末期がん患者，患者の体験，看護介入
Key Words：animal-assisted activity, palliative care unit, terminal cancer patients, patients' experiences, nursing intervention

I. はじめに

わが国では、がんによる死亡者が年々増加し、1981年以降、死亡原因の第1位を占めている現状がある。それに伴い、政府はさまざまながん対策に取り組み、2006年には『がん対策基本法』が制定され、より一層がん対策を推進していくための環境が整備された¹⁾。

がん患者の多くは、疼痛などの身体的苦痛以外にも、がんと診断された時点から不安や抑うつなどの精神的な苦痛を抱えることになり、さらに家族も患者と同様にさまざまな苦痛や課題を抱えることとなる。また、がんと診断される前の日常生活と異なる体験と折り合いをつけながら日常生活を過ごすことにもなってくる。このようなことから、がん患者にとって、普段の生活を重視した看護介入は、患者のみならず、その家族の心身の苦痛の軽減および生活の質の維持・向上に役立つものと考えられた。

そこで、「家族の一員」としての存在が重視されている動物を介在した看護介入によって、がん患者の生活の質(Quality Of Life; QOL)が向上できないか考えた。わが国の人間と動物の関係は、2000年12月「動物の愛護及び管理に関する法律」が改正され、動物、とくにイヌやネコなどのペットが、単なる愛玩動物ではなく、家族の一員、人生の伴侶であるとの認識が高まっている。とくに緩和ケア病棟に入院している終末期がん患者にとって、病室で過ごす時間は貴重となるため、看護師は患者のQOLを高めるためにも環境を整えることが重要である。ゆえに入院中であっても、動物とのふれあいを希望している終末期がん患者にとって、動物とふれあう環境を整えることは、患者のQOLを高めることに直結すると考えられる。

動物介在に関する文献検討について、文献データベース

『医学中央雑誌』を使用し、キーワード「動物介在活動」で検索したところ、2004年～2009年で24件の報告があった。その対象は、小児(幼稚園)、精神疾患患者、高齢者(施設入所者)であり、介在する動物はイヌやネコであった^{2)~6)}。

わが国では、諸外国のように医師が動物介在プログラムを計画し、治療の一環として動物介在を行っている病院は少なく、ボランティアによって動物介在活動が実施されている。その多くは介護・福祉施設で、病院での実施はごくわずかである。しかしながら、動物介在活動を実施している病院からは入院患者のQOLの向上の報告がされており^{7)~13)}、緩和ケア病棟入院中の患者を対象にした場合でも有効であると考えた。

そこで、本研究では、緩和ケア病棟に入院している終末期がん患者のQOLの向上を目指して、緩和ケア病棟において動物介在活動を実施し、参加した入院患者の体験から、入院中に動物とのふれあうことの意味を見出し、ターミナルケアにおける動物介在活動を活用した看護援助を検討することを目的とした。

II. 用語の定義

動物介在活動(Animal Assisted Activity; AAA)：AAAは、動物とのふれあい活動である。対象の、生活の質の向上、情緒的な安定、レクリエーション等を目的として実施される。多くはボランティアとして行われる¹⁴⁾。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究では、横断的・記述的デザインを用いた。

1) 日本保健医療大学保健医療学部看護学科 Department of Nursing Sciences, School of Health Sciences, Japan University of Health Sciences

2) 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 Graduate School of Health Biosciences, The University of Tokushima

3) 筑波大学大学院人間総合科学研究科 Postgraduate School of Human Comprehensive Science, University of Tsukuba

2. 調査対象者（研究参加者）

研究参加者は、A総合病院緩和ケア病棟に入院中の患者で、動物に恐怖心がなく、ふれあう動物にアレルギーがなく、苦痛症状が軽減しており、15～30分程度の面接が可能であって、動物介在活動に参加した患者のうち、研究協力の同意が得られた者10名を対象とした。

3. データ収集方法

- a. 調査期間：2006年7月から10月の間に実施した。
- b. 方法：緩和ケア病棟において月1回、B市獣医師会が行っている動物介在活動に同行し、終了後に面接を行った。
 - ① 動物介在活動の方法：B市獣医師会が患者との接触に問題がないと診断し、社会的しつけがなされている動物（イヌ、ネコ、ウサギ）を用い、毎月1回、30分間程度、患者は自由に病室やラウンジで動物とふれあう。
 - ② 面接方法：動物とのふれあい活動後に半構成的面接を行った。緩和ケア病棟責任者と協議のうえ、参加者の疲労状況を考慮し1回の面接は30分以内とした。参加者の体調に十分留意し、不調を訴えた場合は面接を延期あるいは中断する、などの配慮をした。面接は、病室において、参加者が受ける医療や看護に直接には関与がなく、病棟看護師ともかわりのない大学教員が1名で行い、(1)動物への思い、(2)動物とふれあった感想、(3)動物がいる入院環境などについて語ってもらった。面接内容は、参加者の承諾を得てICレコーダに録音し、面接内容をすべて逐語録として記述した。

4. 分析方法

Giorgi^{15) 16) 17)}を参考に、以下の手順で行った。

- ① 参加者の言葉どおりに書き写された逐語録を、全体の意味が理解できるまで精読する。
- ② 参加者の体験をなるべく歪めることなく文脈を探り、動物とのふれあいについて語られている部分を抽出した。同じ状況について語られている部分を1つの意味単位として、前後の文脈や体験全体と関連づけながら、参加者にとってどのように意味づけられているかを把握した。
- ③ 各参加者の記述から意味単位を取り出し、それを特徴づける参加者の言葉で表した。
- ④ 記述された参加者の言葉を研究者の言葉に置き換えながら、意味単位ごとに記述を行い、それぞれの中心となるテーマを見出した。
- ⑤ 全体を眺め、中心となるテーマを整理し、参加者のパースペクティブから動物とのふれあいにおける参加者の体験、その意味を明らかにしていった。

5. 分析の真実性

真実性の確保として、質的研究を行っている研究者を含む研究者間で、繰り返し分析結果を検討した。その後、分析結果を動物とのふれあい活動を実際に行っている看護師に、得られた意味が了解可能かどうかの視点で確認を得た。

IV. 倫理的配慮

研究参加の依頼は、調査対象の候補者に対して医療や看護に直接に関与しない研究者が個別に行い、研究の目的と意義、方法、研究への参加は自由であり、拒否することや途中でも中断できること、その場合でも不利益は一切生じないこと、データは個人が特定されないこと、結果は研究目的以外には使用しないこと、学会・論文発表の公表などについて文書および口頭で説明し、同意書に署名を得た。

対象者は緩和ケア病棟に入院中であり体力の消耗が考えられるため、調査を行う際には対象者の体調に常に注意を払い、できる限り負担がかからないように配慮した。

なお本研究は、静岡県立大学倫理審査部会の承認を得、その後、調査対象病院倫理委員会の承認を得て実施した。

V. 結果

1. 研究参加者

A総合病院側責任者から12名の患者が紹介され、全員から参加の承諾が得られた。しかし、2名が動物とのふれあい直前に容態が悪化したため、10名（男性4名、女性6名）が研究参加者となった。参加者の概要は表1に示すとおりである。参加者の平均年齢66.9（SD 13.8）歳（最高83歳、最低43歳）、面接時の平均入院期間47.4（SD 114.8）日、動物とのふれあい活動への参加回数は、2回が3名、1回が7名であった。

参加者全員が動物の飼育歴があり、飼育動物との面会を希望していた。

面接回数は2回が3名、1回が7名で、面接総所要時間は平均12.0（SD 9.4）分（最長38.4分、最短3.2分）であった。全員から面接録音の了解が得られた。最短3.2分をデータに加える理由は、短時間であっても意味深い言葉が表出されたからであった。

2. 面接内容

動物とのふれあい活動に参加した体験は、個性がある一方で、共通のテーマが見出された。それには、【動物の存在から得た安心感】【生きている動物自体から得る癒し】【苦痛からの解放】【ゆとりの創出】【生きていることの確認】があった。

表1 研究参加者の概要

患者	性別	年齢	疾患名	動物への関心	動物の好き嫌い	動物の飼育歴	動物の飼育年数(年)	飼育動物の種類	初回面接時入院期間(日)	面接回数
A	女	58	肝細胞がん 骨転移 リンパ節転移	どちらとも いえない	どちらとも いえない	ある	.1	イヌ	28	2
B	女	46	右乳がん 脳転移	ある	好き	ある	10	イヌ インコ	373	2
C	女	43	乳がん 肺・肝・骨転移	どちらとも いえない	好き	ある	5	ハムスター	2	2
D	男	83	大腸がん 胃がん	ある	好き	ある	83	イヌ ネコ 鳥 ウサギ	11	1
E	男	73	肝細胞がん	ある	好き	ある	25	イヌ オウム	29	1
F	女	77	肺がん	ある	好き	ある	35	イヌ	8	1
G	男	69	肺がん	ある	好き	ある	59	イヌ ネコ	8	1
H	女	67	直腸がん 肺転移、脳転移 小脳出血後	ある	好き	ある	.3	ネコ	2	1
I	男	81	中咽頭がん	ある	好き	ある	7	イヌ	11	1
J	女	72	肝細胞がん	ある	好き	ある	11	イヌ	2	1

テーマを構成する意味単位を〔 〕、参加者の語りを「 」で表した。なお、語りのなかでの（ ）は補足した部分である。

a. 動物の存在から得た安心感

【動物の存在から得た安心感】には、「家族の一員としての動物の存在」〔語り相手としての動物の存在〕〔通じ合える動物の存在〕〔ほっとする存在〕が語られていた。参加者にとって動物が、家族の一員として、語り相手となり参加者の気持ちを汲み、通じ合える存在として体感され、人間の精神の安定に影響する重要他者として存在することで、安心感を得ていたことを以下のように語っていた。

参加者E氏は、「家族以上ですね。じいさん、ばあさん、おやじ、嫁さん、そのなかへ犬が1匹入って、かわいがって……。散歩に連れて行った犬は、たまたま具合悪くて入院した後、犬がいないと心配するからね。そういうときに会わせたら喜ぶわね。だから、そういう心と心の触れ合いというのは、決して犬と人間と差別をつけられない」と〔家族の一員としての動物の存在〕について語っていた。

また参加者B氏は、「(動物に)語りかけると、何か返事をしてくれるような感じがあるんで、そこも何かいいなと思って」と〔語り相手としての動物の存在〕について語り、参加者F氏は、「(動物は)かわいがっていると素直なんですよね。うん、素直です。そうですね。通じますね。かわいがればかわいがただけのことはわかっています」と〔通じ合える動物の存在〕について語り、動物の存在から安心感を得ていた。

b. 生きている動物自体から得る癒し

【生きている動物自体から得る癒し】には、「動物自体の癒し」〔接触・体温を感じることで癒し〕〔会うことでの癒し〕が語られていた。実物の動物を見たり接触したりするなど動物に対する参加者の知覚を通して、参加者は癒される体験をしていたことを以下のように語っていた。

参加者J氏は、「いま、こんな動けない状態だから、車椅子で行ったりしなきゃならないけど、そういう犬とか猫がいれば、やっぱりいいかなと思うんです。やっぱり親しみがわくというか……」、また参加者A氏は、「犬だって人間がいるから生きていられる。人間だって癒される犬であれ、猫であれ、そういうものがあって、私は癒される部分があるんだから、だから(他の人も)同じだと思う。ただ、それがあまり興味ない、あるというのはあるかもしれないけど、でも全然嫌いじゃない、寄せ付けないという人はいないと思う。これで2回目ですけど、やっぱり答えるとなると、やっぱり難しいですね。お会いしていくたびに、やっぱり難しくなっていく」など、動物の表情やしぐさによって得られる親しみや和みに関連した〔動物自体の癒し〕とそれを具体的に表現することの難しさを語っていた。

また、参加者B氏は、「触ったりすると、とくに癒される感じはします。(それは体温などを感じるからですか?) そうだと思います。(それはぬくもりなんですかね?) はい」と、〔接触・体温を感じることで癒し〕を語っていた。

c. 苦痛からの解放

【苦痛からの解放】には、〔緊張感からの解放〕〔頑張りからの解放〕〔痛みからの解放〕〔好きな動物がいる喜び〕〔日常と異なる時間・空間〕〔考え込みからの解放〕〔気が紛れる〕〔穏やかに感じる時〕〔楽しみの創出〕〔心身が楽になる〕が語られていた。参加者は、好きな動物とふれあうことで、病気による心身の痛みや緊張感、それらに蔓延した日常空間との対峙から一時的にしる解放され、動物介在活動を通して動物とふれあう楽しみができるとともに穏やかな時間が流れ、心身が楽になる体験をしていたことを以下のように語っていた。

参加者C氏は、「明日がね、手術なんで、すごい緊張してるっていうのがあったんだけど、なんかすごい、それが楽になった。かわかった、すごく。だからやっぱりね、結構、緊張して。で、熱がね、7度3分あったんですよ、はじめ。で、うち帰ってみたら、6度7分に下がってたの。“ナンダコレ”とか言ってる。だから、緊張がほぐれたからだと思う。熱が下がったんだと思うんだけど。ああよかったーと思いました」と〔緊張感からの解放〕について語り、「力が抜けるって言ったらいいのかな。ただ頑張りなきゃというのが、ちょっと力が抜けて、“うわあ、かわいい”って、単純にかわいいっていうふうになる」と〔頑張りからの解放〕を語っていた。さらに「心のリハビリって言ったら大げさだけど、そういうのが必要だと思うから、だから和むということは、気持ちが楽になることだから、とてもいいと思いますけどね。だから、やっぱり楽になるというか、心身とも楽になるような感じ」と、〔心身が楽になる〕ことを語っていた。

参加者G氏は、「(動物とのふれあいの間は、痛みとか)忘れちゃいますね。それは好きだからでしょうけれども、好きな間中は、神経がそっちへ行っちゃっていますもんですから。それはいまま、そろそろ痛み止めを飲んでおいたほうが無難かなと思って、終わってからそんなことを。見ているときはそんなことは忘れちゃっていますから」と動物介在活動中には痛みを忘れていた状況である〔痛みからの解放〕を語っていた。

参加者B氏は、「病院は動物とかいないものだと思っていたので、すぐそばに(動物が)いるっていうのが何かうれしくて、それで最初ちょっと涙が出ました」と、〔好きな動物がいる喜び〕を語っていた。

参加者A氏は、「私はいま自分の命が、どうのこうのってとこまで、段階から止まっているから。余裕をもって人のこと見れるもんで。でもいずれ私もああいうふうになって、それがいつになるか、先になるか、それはね、誰にもわからないから。先生にもわかんないことだし。その日が来るまでね、一日一日がんばるだね。今日もルイちゃんとねえ、

あの子が来て、また違った一日が過ごせました。いつもやっぱりもう、一人でテレビ見ているか、もう寝ちゃうか。葉強い使ってるもんで、ひどいときはもう、ほとんど寝てる時が多いですよ。短い時間だったけど、また違った時間を過ごせたかなって」と、動物の名前を出しながら、動物たちと過ごすいつもと異なる時間があるからこそ一日一日を頑張れること、がんと向き合っている〔日常と異なる時間・空間〕を過ごすことの重要性を語っていた。

参加者J氏は、「みんなおとなしくて、すごく静かな感じで、抱いているといつまでも抱いていたいっていう、そういう気分です」とおとなしい動物たちの静かに過ごす時間、〔穏やかに感じる時〕を語っていた。

d. ゆとりの創出

【ゆとりの創出】には、〔他者への関心〕〔動物・飼い主への関心〕〔自己の振り返り〕が語られていた。動物とのふれあい活動を通して、他者、動物や自分が飼育していた動物などに関心をもったり、自己を振り返る時間ができたり、病気や生死に関すること以外のゆとりの時間が創出される体験であったことを以下のように語っていた。

参加者A氏は、「今日来てた人でも、一番先に部屋に帰っちゃった人なんか、入ってきたときと出て行くときの表情が全然違ったもんね。おじいちゃんは最初にネコ抱いていたけど、あのおじいちゃん、ネコのほうが好きなのかな。ネコずっと抱いていたから。最初イヌだったけど。好きな人はね、多分あの人あたりも、おうちで飼ってるんじゃないのかな」と〔他者への関心〕を示す発言や、参加者G氏は、「あまりこのごろ動いていなかったもんですから……(中略)私も少し歩いてって言われているもんですから、それも何もなければ、それこそ普通の機械的な散歩みたいになっちゃう。それこそ、その先にワンちゃんいるよって言えば、それは遠くても出かけちゃいますから、いい運動になると思いますけどね」と動物がいるからこそいつもより歩行ができるなど、〔動物・飼い主への関心〕を示すような語りがあった。

e. 生きていることの確認

【生きていることの確認】には、〔再会の喜び〕〔動物の体重増加による変化の実感〕〔温かみの実感〕〔動物がなついてくれることで必要とされる実感〕〔大事なものの好きなことと過ごす充足感〕が語られていた。参加者が、動物の体重増加や温かみという生体の変化や再会というときの变化、動物がなついてくれることで自分が必要とされる実感をもつこと、人間にとって大事なものの好きなことと過ごす充足感によって、生を実感する体験となっていたことを以下のように語っていた。

複数回、動物介在活動に参加している参加者A氏は、「たまたまね、ぼっと来たなかに、前に来たのと同じ子が

2匹来てたから、再会できてうれしかった。だからやっぱり、すぐに抱いてやれたし。だから、うーん、だから、会う前と会った後ではやっぱり、全然違うね。うーん、だから、全然知らないのぼっかだったら、あれだろうけど。多少気分的に癒されたかなあって。再会できたことによって」と、〔再会の喜び〕を語っていた。また、「ずうっと最後まで、あれして（抱いて）いたら腰痛くなっちゃった。重かった、うん。体重増えてた。前はね、もっとね、軽かったもん」と、動物の成長を実感し、その変化の間、自分が生きていたことを実感するかのように〔動物の体重増加による変化の実感〕を語っていた。

参加者B氏は、「生きているものなので、しゃべることはできないですけど、やっぱり温かみがあっていいと思います。（そうですね。やっぱり温かみがあるから、いいですね）はい。（何かぬくもりとか、ひざの上へ上げると感じますよね）はい」と、生きている動物の〔温かみの実感〕を語っていた。

参加者A氏は、「こういう病棟ってのは、一般病棟と違うわけじゃないですか。だからそういう面ではもうちょっと、本当に好きな人には、もっとオープンになってあげてもいいんじゃないかなって感じますけどね。それで、その人が1日でも長く生きられればね」と、〔大事なもの・好きなことと過ごす充足感〕が語られていた。

VI. 考 察

1. 緩和ケア病棟における動物介在活動に参加したがん患者の体験

病気は、通常の社会生活を断念させる等の理由ばかりでなく、人間存在そのものを脅かし¹⁸⁾、病床の最も基本的な特徴の一つとして患者の孤立がある¹⁹⁾が、とくに緩和ケア病棟に入院している患者の孤立感は表現しがたい深さがあると思われる。そのなかで、患者が緩和ケア病棟で行われる動物介在活動に参加し、動物とのかかわりや関係性、そこに参加している人々とのかかわりを通して、【動物の存在から得た安心感】【生きている動物自体から得る癒し】【苦痛からの解放】【ゆとりの創出】【生きていることの確認】を体験していた。

緩和ケア病棟での入院患者は、自身の緩和ケア病棟への入院を機に、がんを診断されたときより短くなった残された時間を予測することになり、いま現在をいかに自分らしく過ごすかが問われることになる。そのため、自分の生命といままで歩んできた人生に絶えず向き合わざるを得ない状況となり、その根底に絶え間ない緊張感と孤独感のあることが推測される。そのような状況にある人間にとって、有史以前から人類がともに暮らしを楽しんできた動物は、

家族の一員であったり、語り相手として、ほっとするような感覚を得ることのできる存在であり、【動物の存在から得た安心感】があったと考えられた。また、人間と動物との関係において重要なことに、人間は動物に自分の考えや感情を投影できる点がある²⁰⁾。言葉にはしない動物への語りかけは、緊張感や孤独感を抱えている参加者にとって、安心して語れる存在となり、参加者B氏や参加者F氏の語りにもあったように通じ合う感覚を得て、安心感が得ることができていたと思われた。

また、参加者C氏の語りでは、手術を明日に控え緊張し微熱もあったが、動物介在活動に参加したことで緊張がほぐれたことを述べていた。さらに、上述の安心感を得られたことが動物とのかかわっているときの痛みの解放感（参加者G氏）や、「ただ頑張らなきゃというのが、ちょっと力が抜けて……」（参加者C氏）とあるように、緊張感、孤独に考え込んでいる状況など【苦痛からの解放】につながっていたように考えられる。動物はストレスを和らげ、この世の面倒なことから一時的に逃れさせてくれ、批判することなく延々と話を聞いてくれる忠実な仲間となってくれる²¹⁾。その動物とのかかわりにより、喜び、楽しみ、穏やかな時間を得るなど、病気になる前の参加者の普段の生活を取り戻す時間となり、それが心身の苦痛からの解放をより強化していた。それとともに、動物介在活動を通して、参加しているほかの患者や動物、自分が飼育していた動物などにも関心をもつ【ゆとりの創出】につながっていた。

自らの余命時間と向き合い、日々の時間の重みを実感しているであろう緩和ケア病棟に入院しているがん患者にとって、動物との再会や動物の体重増加による変化の実感、生き物の温かみを実感すること、動物がなついでくれることで必要とされる実感により、参加者自身が【生きていることの確認】を体感し、さらに、それらが関与しあって『自己存在』の強化になっていったと考えられた。

つまり、緩和ケア病棟における動物介在活動に参加したがん患者にとって、さまざまな人間の欲求を満たす包容力のある動物²²⁾は、その存在そのものにより【動物の存在から得た安心感】【生きている動物自体から得る癒し】を得ていた。さらに動物とのかかわりや動物介在活動を通して他者とのかかわりにより【苦痛からの解放】【ゆとりの創出】から【生きていることの確認】となり、『自己存在が強化され、与えられた生を主体的に生きる』体験になっていると考えられた。

2. ターミナルケアにおける動物介在活動を活用した看護援助

緩和ケア病棟における動物介在活動は、がん患者にとって心身の苦痛などから緊張感や孤立・孤独感を抱えている

患者を解放し、自己存在が強化され、与えられた生を主体的に生きる体験となっていた。これらの効果ある介入を、さらにQOLの向上やスピリチュアリティケアに発展するためには、①動物介在活動における看護師の具体的なかわりとその効果の検討、②動物への関心が高くない患者に対する動物介在活動方法の検討、の必要性が示唆された。

① 動物介在活動における看護師の具体的なかわりとその効果の検討

動物介在活動を通して得られたがん患者の『自己存在が強化され、与えられた生を主体的に生きる』体験を、動物介在活動時間のみならず、たくさんあるとはいえない貴重な日々の生活のなかに、いかに意味づけていくのかが看護援助として重要なことではないかと思われる。一つの援助として、動物介在活動中やその前後における看護師の声かけや、患者が体験したことを語る場や家族との共有する場や機会を意図的に設定することなどが重要であると考えた。動物介在活動を実施している病院が少ない現状では、まずは病院においても実施することが優先課題であるが、今後、動物介在活動における看護師の具体的なかわりとその効果を検討する必要性が明らかになった。

② 動物への関心が高くない患者に対する動物介在活動方法の検討

参加者の多くは入院前より動物に関心があり、飼育体験をもっていた。入院前の個人の嗜好性や体験が、動物介在活動への有効性に影響するのではないかと考えられる。活動への参加は主体性が重んじられることは周知のことであるが、参加者J氏での語りにも関連するが、動物への関心が高くない患者への活用方法の検討も必要と思われた。今回の参加者の語りでは、直接、動物と触れることの重要性が示唆されたが、たとえ動物に触れなくても、その患者個人に応じた動物介在活動があるように思われる。例えば、

動物や活動場面の写真やビデオなどの視覚体験、患者個人に負担にならないような活動のアナウンスや看護師の声かけなども、今後、看護援助を検討する際に必要なことになるのではないかと考えられた。

入院期間が短い緩和ケア病棟だからこそ、介在する動物のあり方を検討する必要があると思われた。動物介在活動に複数回、参加していた参加者A氏は、動物との再会や動物の成長の変化を実感していた。そのことは、まさしく参加者が生きていることを実感する時であり、貴重な時間となっていた。しかしながら、入院中に動物介在活動に複数、参加できることが少ない緩和ケア病棟においては、入院患者にとっては1回1回が貴重な場面であるため、それに携わる看護師の支援が重要となる。

VII. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、参加者の体力の消耗などを考慮すると面接時間が限定され、参加者の体験や思いが十分に語られたとはいえない。しかし、ターミナル期という貴重な時期においてその体験を語っていただけたことの意義は深い。緩和ケア病棟での患者のQOLをさらに向上するためには、面接方法および記述を検討し、ターミナル期における患者の深遠な体験により近づく必要がある。今後は、動物介在活動におけるその後の患者および家族の変化を明らかにし、動物介在活動がより効果的な看護援助になるように検討を重ねることが課題である。

謝 辞

本研究の実施にあたり、貴重な時間を割いて体験を語ってくださいました皆様、多大なご配慮をくださいました緩和ケア病棟職員の皆様に心より感謝申し上げます。

要 旨

緩和ケア病棟に入院している終末期がん患者のQOLの向上を目指して、緩和ケア病棟において動物介在活動を実施し、参加した入院患者の体験から、入院中に動物とのふれあうことの意味を見出し、その意味をとらえた看護援助を検討した。横断的・記述的方法を用いて、動物介在活動終了後に半構成的面接を行った。動物介在活動に参加し、動物とのかわりや関係性、そこに参加している人々とのかわりをおして【動物の存在から得た安心感】【生きている動物自体から得る癒し】【苦痛からの解放】【ゆとりの創出】【生きていることの確認】を体験していた。さらに、これらを通して自己存在が強化され、与えられた生を主体的に生きる体験となっているように考えられた。

緩和ケア病棟における動物介在活動は、心身の苦痛などから緊張感や孤立・孤独感を抱えている患者を解放し、自己存在を強化し、QOLを向上するためには効果がある介入であることが示唆された。

Abstract

In the present study, animal-assisted activities were conducted for terminal cancer patients hospitalized in a palliative care unit with the objective of improving their QOL, and the patients' experiences were investigated to determine the meaning of interacting with animals during hospitalization as well as nursing assistance that incorporates this meaning. Semi-structured interviews were conducted following the end of animal-assisted activities using a cross-sectional descriptive design. Patients who participated in animal-assisted activities experienced the following through the human-animal bond as well as interactions with animals and other participants: "gaining a sense of comfort through the presence of animals", "healing from the live animals themselves", "release from pain", "feeling more at ease", and "confirmation that they are alive". In addition, through these experiences, patients appeared to gain a stronger sense of their own existence.

These results suggest that animal-assisted activities in palliative care units are an effective intervention for releasing patients from the tension and feelings of isolation and loneliness that arise from physical and emotional pain, strengthening their sense of existence, and improving their QOL.

文 献

- 1) 財団法人 厚生統計協会 編：国民衛生の動向2009. 厚生 の指標 (臨時増刊), 56(9), 151-154,2009.
- 2) Le Roux, M C, Kemp, R: Effect of a companion dog on depression and anxiety levels of elderly residents in a long-term care facility. *Psychogeriatrics*, 9(1), 23-26, 2009.
- 3) 内田朋子：認知症高齢者に対する動物介在活動導入への試み — 笑顔の絶えない安らぎの環境づくり. *日本精神科看護学会誌*, 51(3), 387-391, 2008.
- 4) 三上崇徳, 木場有紀, ほか：広島県下の私立幼稚園における動物飼育に関するアンケート調査. *Animal Nursing*, 13(1), 55-61, 2008.
- 5) Uetake, K, Otsuka, N, et al: Stress response of dogs repeatedly participated in animal-assisted activities at special nursing homes for elderly people. *Animal Behavior and Management*, 43(4), 192-198, 2007.
- 6) 熊坂隆行, 升 秀夫, ほか：特別養護老人ホームでの動物介在実習前後における動物看護科学生の「気分」の変化. *Animal Nursing*, 12(1), 64-68, 2007.
- 7) 箕浦とき子, 新田静江：特別養護老人ホーム入所高齢者に対する「動物との触れ合い活動」の健康への影響. 第6回「健康文化」研究助成論文集, 129-135, 1998.
- 8) 熊谷彰芳, 小林美智子, ほか：QOL評価を用いたアニマル・アシスティッド・セラピーの効果判定方法に関する研究. 第4回「健康文化」研究助成論文集, 37-43, 1998.
- 9) 加藤謙介, 渥美公秀：老人病院におけるドッグ・セラピーの効果 — 集合性の変容 —. *看護展望*, 24(4), 503-507, 1999.
- 10) 佐久川肇, 保住芳美：老人とペットの関わりについて. *川崎医療福祉学会誌*, 9(2), 145-148, 1999.
- 11) 金森雅夫, 鈴木みずえ, ほか：痴呆性老人デイケアでの動物介在療法の試みとその評価方法に関する研究. *日本老年医学会雑誌*, 38(5), 659-664, 2001.
- 12) 鈴木みずえ, 山本清美, ほか：痴呆性老人を対象とした動物介在療法 (Animal Assisted Therapy: AAT) の個別の効果と経過の分析. *保健の科学*, 44(8), 639-646,2002.
- 13) 真野充弘, 内苑まどか, ほか：痴呆性高齢者に対するドッグセラピーの試み. *日本痴呆ケア学会*, 2(2), 150-157, 2003.
- 14) 柴内裕子：厚生労働省平成13年度老人保健健康増進等事業 — 高齢者福祉施設等における動物介在活動／療法実施のための施設伴侶動物同居マニュアル. 参考資料 8, 社団法人日本動物病院福祉協会, 東京, 2002.
- 15) Giorgi, A: *Phenomenology and the Foundations of Psychology*. University of Nebraska Press, Nebraska, 1976: *Duquesne Studies in Phenomenological Psychology*, 1(1970), Duquesne University Press, Pittsburgh, 1971 (早坂泰次郎 監訳：心理学の転換 — 行動の科学から人間科学へ. 勁草書房, 東京, 1985).
- 16) Giorgi, A: *Psychology as a human science*. Harper and Row Publishers, New York, 1970 (早坂泰次郎 監訳：現象学的心理学の系譜 — 人間科学としての心理学. 勁草書房, 東京, 1981).
- 17) Giorgi, A (吉田章宏訳)：看護研究への現象学的方法の適用可能性. *看護研究*, 37(5), 49-57, 2004.
- 18) Berg J H van den: *Psychology van het Ziekbed*. American edition, 1975 (早坂泰次郎, 上野 轟 訳：病床の心理学. 109, 現代社, 東京, 1975).
- 19) 前掲13), 84.
- 20) Gunter, B: *Pets and People The Psychology of Pet Ownership*. Whurr Publisher Ltd, 1999 (安藤孝敏, 種市康太郎, ほか 訳：ペットと生きる — ペットと人の心理学. 49, 北大路書房, 京都, 2006).
- 21) 前掲20), 23.
- 22) 前掲20), 48.

[平成22年 9月30日受 付]
[平成23年 9月22日採用決定]